

わたしのことば

漫画家・タレント ^{ほしの}星野ルネ

君しか知らないこと



撮影:東京新聞

1984年カメルーン生まれ。ツイッター上で発表していた、自身の日常を描いたエッセイ漫画が話題となる。著書に、『まんがアフリカ少年が日本で育った結果』(毎日新聞出版)、『星野ルネのワンダフル・ワールド・ワーズ!』(集英社)など。

「誰」

かの考えたことじゃなくて、君しか知らないことを聞かせて欲しいんだ」

大物演出家の放ったこの言葉に、部屋に集まっていた新人作家たちは、はっと目が覚める様な感覚を覚えていた。

私は一九八四年、アフリカ大陸西南部にあるカメルーン共和国で生まれた。故郷は空港のある都市部から車で一日かかる。ジャングルを貫く赤土の道路の両側に建てられた土壁とトタン屋根の住居が立ち並ぶ小さな農村だ。

私はカメルーンのどこにでもいる、田舎育ちの少年として育つことはなかった。チンパンジーの生態調査の目的でこの地を訪れていた日本の研究チームがあった。母は研究者の一人、「星野」と結婚することになった。母の結婚は私に二つの変化をもたらした。「父」が出来たこと、そしてもう一つは、

遙か東アジアに位置する日本という国へ移り住むことだった。

兵庫県姫路市にある、とある保育園で私の日本社会での生活ははじまった。地元の日本人の園児たちにかこまれたアフリカ人園児の自分。お互いに完全なる未知との遭遇であっ

たことだろう。はじめは環境の変化と言葉の壁に阻まれ、混乱の日々が続いたが、次第に同じ歳の園児たちの輪の中に溶けていった。

その後、小学校、中学校、高校と成長過程のほとんどを日本で過ごした。その間に何度か故郷であるカメルーンにも帰省した。アフリカ系の少年として日本で育つなかで、色々なことを経験した。自分に興味をもち話しかけてくれる者、心ないことを言う者、心配して手をかしてくる者、偏見を隠しきれない者。様々な出来事に一喜一憂しつつ、様々な学びを得ながら育った。

時はたち、私は創作や表現が好きな大人になっていた。上京後に、放送作家という職業に魅せられ、ある新人作家のオーディション企画に臨んだ。課題として、作家の卵である我々の出した企画に目を通した演出家の言ったセリフが冒頭の言葉だ。

僕たち新人作家が提出したそれぞれの企画案には、共通する問題があった。それは「過去に見た様々な番組などの影響」が強く感じられる点だ。

「君しか知らないこと」

この言葉は、この文の冒頭から語っているような、自らが体験した事を伝える契機の一つになっている。